

論文

社会科学系学部における英語ライティング教育の可能性

——大学院学生対象実習系科目の実践から——*

田林 葉・Oana Maria Cusen・八津川真衣・光田 幸子・河藤 一美

はじめに

- I. 英語ライティング教育をとりまく情勢
- II. 立命館大学政策科学部における英語ライティング教育
 1. 学部教育課程に位置づけられた外国語ライティング教育
 2. 大学院学生対象実習系科目「政策実践外国語（英語）」の趣旨と実践

- III. Writing a Unit Plan プロジェクト
 1. プロジェクトの概要
 2. 大学院学生によるプロジェクトの実践例
 3. プロジェクトの講評
- むすびにかえて—課題と展望

はじめに

英語ライティングの能力育成は、英語教育における重要な課題の一つである。日本の中等教育においては、「英作文」という科目名のもとで、文法の確認とその応用としての和文英訳教育が伝統的に行われてきた。近年は高等学校などで「ライティング」という科目がおかれているが、高等学校における教育課程や大学入学試験の多様化の傾向にあって、教育課程や科目内容の策定は各大学の検討課題である。他の科目同様、英語ライティングにかんしても、教育課程に取り入れるか、また取り入れるならどのような内容にするのかが問われている。

この小論は、立命館大学政策科学部における事例を紹介することを通して、社会科学系学部低回生を対象とした英語ライティング科目の教育内容・方法を検討することを目的とする。このためには英語ライティング教育の全般的な位置づけについて、情勢を俯瞰することが必要であろう。まずは高等学校の学習指導要領などにみられる教育行政政策や、ライティング教育を対象とした研究動向を概観した上で、本学部における英語ライティング教育について述べる。素材として、学部生のライティング指導を目標の一つとして設置した、大学院学生対象の実習系科目「政策実践外国語（英語）」を取り上げる。この科目の趣旨や実践要領を示すだけでなく、共著者の大学院学生自身が開発した教材（ユニットプラン）を抜粋し、この科目の成果と課題を具体的に確認することにより、社会科学系の学部教育における英語ライティング

教育の可能性を示したい。

I. 英語ライティング教育をとりまく情勢

現在多くの大学で英語ライティング科目が開かれていることから¹⁾、大学におけるライティング教育の重要性が理解できよう。一方で、よく知られているように、1991年の大学・短期大学の設置基準改正（大綱化）において、一般教育と専門教育の区分が廃止され、教育課程の編成方針は各大学に任されるようになった²⁾。そのため、大学におけるライティング教育の全体的な動向について論ずるには丁寧な調査が必要であり、これは本稿の範囲ではない。ならば大学に入学する前の高等学校ではどのような教育がなされているのか。これを概観すれば、少なくとも大学入学者に求められるライティング能力の目安となるかもしれない。

現行の「高等学校学習指導要領」（文部科学省、1999）によると、外国語科目として「オーラル・コミュニケーションI, II」、「英語I, II」、「リーディング」、「ライティング」の計6科目がおかれている。指導計画について特記した第3款においては、「リーディング」と「ライティング」は原則として「オーラル・コミュニケーションI」または「英語I」のいずれかを履修した後に履修させるとなっていることから、総合的な技能を伸長させることを目的とした「オーラル・コミュニケーション」と「英語」をまず学習させて、次に特化した技能を伸長させる科目を学ばせる方針であることがわかる。

「ライティング」の目標としては「情報や考えなどを、場面や目的に応じて英語で書く能力を更に伸ばすとともに、この能力を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」と定めており、内容としては以下のようになっている。

(1) 言語活動

生徒が情報や考えなどの送り手や受け手になるように具体的な言語の使用場面を設定して、次のようなコミュニケーション活動を行う。

- ア 聞いたり読んだりした内容について、場面や目的に応じて概要や要点を書く。
- イ 聞いたり読んだりした内容について、自分の考えなどを整理して書く。
- ウ 自分が伝えようとする内容を整理して、場面や目的に応じて、読み手に理解されるように書く。

これらの指針は、コミュニケーション能力の一環としてライティング能力の育成を目指すことを明記している。内容についても、上記アのように、他者によるテキストを素材とする場合でも、(和文の場合はそれをそのまま英訳するのではなく)自分で考えて要点を探す訓練を課し、イとウでは「自分の考え」や「自分が伝えようとする内容」を表現することに重点が置かれている。このように、現行の指導要領は日本語で書かれた他者のテキスト(例文)を逐次訳で英語にする伝統的(または受験英語的)な「英作文」教育とは異なり、あくまで自分の考えを相手に「伝える」ことを目標としていることが特徴である。平成21年度から先行実施予定の新しい指導要領においては、総合的なコミュニケーション重視の方針がさらに強まり、単独の技能を科目名とした「ライティング」は消える予定である³⁾。

それでは教育学分野における英語ライティング教育の研究はどのような状況にあるのか。日本において英語ライティングにかかわる文献は多数出版されているが、自学自習用教材がほとんどである⁴⁾。学術雑誌の論文・記事目録検索では29件ヒットしたが⁵⁾、その内容は工業高等専門学校、看護学校、医科大学のような専門性の高い教育機関におけるEnglish for Specific Purposes (ESP)教育およびブログや電子メールなどオンライン・テクノロジーを活用した教育の実践報告がほとんどであった⁶⁾。この結果から、多くの大学が抱える社会科学系・人文科

学系の学部学生を広く対象にしたライティング教育については、研究資源も豊かとはいえない状況であることがわかる⁷⁾。

このように、日本の大学における英語ライティングは、教育行政・研究の双方において、明確な方向性を持っていない。組織的な取り組みがしにくく、個々の教員が自分の力量に頼みつつ、試行錯誤している状況がうかがえる。

II. 立命館大学政策科学部における英語ライティング教育

それでは社会科学系学部である立命館大学政策科学部では、どのように英語ライティング教育が行われているのか。この節では本学部教育課程におけるライティング教育の位置づけを概観した後、政策科学研究科開講科目である「政策実践外国語(英語)」を事例として、大学の教育課程で目指すべき英語ライティング教育の一例を示したい。

1. 学部教育課程に位置づけられた外国語ライティング教育

政策科学部では1994年の学部設置当初、ライティングを重要視し、英語を選択した学生全員にライティング科目の履修を義務付けていた⁸⁾。その後の改訂でいったん他の科目に統合吸収されたこともあったが⁹⁾、2006年度からの現行教育課程において再び科目として独立させている。この改訂を行ったのは英語教育におけるライティングの重要性を再認識したからであるが、英語ライティングの能力は、ひとり外国語科目によってのみ育成されるわけではない。政策科学部における系統履修は、様々な学習機会を通じて得られた知識、技術、技能が4年間の学習過程の集大成である卒業研究の遂行に収斂されることを意味する。また大学の外国語教育において求められるのは、学生が自らの研究成果を、学習した外国語によって公表する能力を意味している。このような趣旨に沿って、本学部では外国語教育とセミナー科目¹⁰⁾との連携を開始した。セミナー科目においては、年度末に学習・研究成果が報告書として提出される。学習・研究課題は、地方分権改革、まちづくり、国際紛争、文化障壁、経営戦略など多彩であるが¹¹⁾、報告書の提出にあたっては、外国語(ほとんどの学生は英文を選択)によるアブストラクトの添付を義務づけている¹²⁾。

さらに、上記のような英語ライティングをサポートするヘルプデスクを開設した。欧米では留学生の研究論文執筆の支援のために、ライティングセンターを設置している大学も多いが、本学部では、高い英語運用力を持ち、専門的な研究活動に取り組んでいる大学院学生をライティング・チューターとして組織し、専任教員のコーディネイトの下で、授業時間外の英語学習指導を行っている¹³⁾。このように政策科学部・研究科においては、英語（外国語）ライティング能力の開発を、教学全般において優先課題として位置づけている¹⁴⁾。

2. 大学院学生対象実習系科目「政策実践外国語（英語）」の趣旨と実践

上述した英語ライティング教育をささえる、英語科目としてのライティング（英語103,106）は、2008年度から抜本的な改革を行う¹⁵⁾。この改革を見越して今年度から2回生対象セミナー科目¹⁶⁾でパイロットプランを実施するとともに、研究科開講の「政策実践外国語（英語）」において後述するTAの有資格者を育成している。そこで、ここではこの科目の趣旨と実践について簡略に述べることにより、本学部が目指す英語ライティング教育の一端を紹介する。

「政策実践外国語（英語）」は2007年度に新設された大学院学生対象の科目である。この科目は、「英語で研究成果を公表するために、自分の伝えたいことを正確に伝えるライティングスキルの習得」と「実践的なライティング能力ならびにその教授力量の養成」を到達目標としている（「オンラインシラバス」参照）。この科目は一週間に2コマ（90分×2）のミーティングを行い、4単位が認定される演習科目（前期集中）である。今年度はルーマニアや中国からの留学生を含む、政策科学研究科生3名、言語教育情報研究科生3名が受講し、全員優秀な成績で単位認定された。

授業の内容としては、簡単な自己紹介を英語で書いてもらい、受講生のライティングレベルを確認した後、15週で以下の四つのプロジェクト—①The Day I Was Born, ②Decoding Kyoto, ③Story/Essay Relay ④Writing a Unit Plan—に取り組んだ。それぞれのプロジェクトについて詳述することは本稿の範囲を超えているが¹⁷⁾、次節では本科目の総決算ともいえる最終プロジェクトである④について、受講生の実際の成果を紹介しつつ、検討する。

Ⅲ. Writing a Unit Plan プロジェクト

1. プロジェクトの概要

最初の数回は他のプロジェクトと同時並行することもあったが、このプロジェクトは Semester の後半およそ7週にわたって行われた。受講生に求められたのは、卒業時に自分の研究内容（アブストラクト）を150語以上の英語で書くことを目標とする社会科学系学部の1-2回生を対象に、楽しみながらライティングの能力を伸ばさせる教材の開発であった。授業はそれぞれのプランを持参し、教員や学生によるフィードバックを繰り返すワークショップ形式で行われ、二度にわたる模擬授業を経て、学期末には教材一式を含むレポートを提出した。受講生のプランはまさに多岐にわたり、いずれも興味深いものであった¹⁸⁾。

2. 大学院学生によるプロジェクト¹⁹⁾の実践例

以下に共著者のユニットプランを抜粋して紹介する。

(1) Introducing Aspects of Japanese Culture and Society to Foreigners²⁰⁾

1) UNIT RATIONALE

AIM

For a long part of its history, Japan has been a closed country. Despite receiving some Christian missionaries earlier, it finally opened its borders to foreigners only in the Meiji period, in the 19th century. Nevertheless, it would seem that foreigners face big difficulties adapting to life in Japan and being accepted into the culture even today.

The overall aim of this unit is to raise Japanese university students' awareness of the problems that foreigners living in Japan are facing, as well as their understanding of foreigners' views on Japanese culture and society. It is hoped that this might constitute one step toward better intercultural communication in Japan.

[7 sections omitted here: Theoretical underpinnings; Content; Four skills; Learning strategies; Vocabulary; Grammar; Interactive tasks]

SEQUENCING

The lessons in this unit have been designed with a focus on activities on academic skills, namely writing an academic essay, and doing field research and library research. Students are expected to research and write about a topic connected to the central theme of the unit: introducing aspects of Japanese society and culture to foreigners.

The introduction of academic skills has been sequenced in the unit so as to reflect the usual sequence of academic research, as follows:

- field research;
- library research;
- essay planning: graphic organizer (GO) ;
- essay writing in multiple drafts.

[3 sections omitted here: Role of the teacher; Role of the students; Homework, feedback and error correction]

EVALUATION

Teachers evaluate students to analyze their understanding and to give students appropriate feedback. Two kinds of assessment, namely formative assessment and summative assessment are conducted throughout the unit.

Formative evaluation is conducted more than once throughout this unit, as students receive extensive feedback from both the teacher and their peers. They are then expected to incorporate the feedback into their learning process, leading to the completion of the academic essay.

At the end of the lesson, the teacher confirms that the goals of the instruction have been achieved and students have learned what they were supposed to learn after using the instructional unit. Summative evaluation is typically quantitative, using numeric scores or letter grades to assess learner achievement. In this unit, students are to submit their final paper about Japanese

culture in the last lesson for the teacher to evaluate and grade.

REFLECTIONS ON MOCK LESSONS

Mock lessons were carried out for lessons 3 and 4 of the unit, with graduate students and the two professors of the course as 'students'. Three main observations could be made about these mock lessons.

First, the 'students' seemed to enjoy the activities very much and enthusiastically participated in the lesson. However, the activities planned seemed to be too much for the allotted time of six course periods. Therefore, this unit plan may need to be reorganized to allow for two course periods for both lessons 3 and 4, which turned out to be the most demanding on students. Finally, in this unit plan, the students get very little content input from the teacher, and thus it may be necessary to increase the number of readings on Japanese culture seen through foreigners' eyes. In this way, students would get a better idea of what kind of academic essays are expected from them at the end of the unit. They will also receive valuable vocabulary and academic language input through texts level-controlled by the teacher to suit the students' proficiency.

This unit plan was designed for students at a rather advanced level of English, with an aim to improve their academic skills. I would welcome any comments from teachers who might decide to use this plan in their course planning. Thank you.

2)TEACHER UNIT PLAN

Activity: Introducing aspects of Japanese culture and society to foreigners

Aims of the activity:

- students learn a few aspects of field research
- students learn how to do library research
- students learn the basic structure of an English academic paper
- students practice writing short academic papers in English

Final purpose of the activity:

- write a 1000-1500 word paper introducing and explaining one aspect of Japanese culture and society

Lesson plans:

● Lesson 1

- introduce the activity to the students and have them form groups of 3 or 4 people
- explain that the activity will involve some field research: asking a few foreign students around campus what interests/puzzles them about Japanese culture and society
- separate into groups and discuss a few ideas about how the field research should be carried out
- have each group present their ideas to the whole class and finalize the field research protocol:
 - ◇ approaching the foreign students
 - ◇ what questions will be asked
 - ◇ thanking the subjects for their participation
 - ◇ promise to send them the finished paper
- homework: carry out the field research as a group and make a list of the answers

● Lesson 2 (in a computer lab)

- each group presents the topics connected to Japanese culture and society they elicited during field research
- in each group they decide on one topic for research and present it to the class, as well as the reason for choosing it
- in groups, students discuss all the information they already know about the topic, and think about what they need to research further
- the teacher explains to the whole class how to do library research: OPAC, data bases (English and Japanese references)
- homework: do the library research and bring all the information to class; read the sample paper

● Lesson 3

- the teacher explains the basic structure of an English academic paper, emphasizing the thesis statement, the topic sentences and the organization of the paragraphs
- in groups, students share the information they have researched and decide what to include in their paper and how to organize the paragraphs
- in groups, students discuss and decide on their thesis statement and topic sentences
- homework: write a draft of the body of the paper (each member of the group writes one paragraph)

● Lesson 4

- the teacher explains the main points of paragraph unity, and walks around the groups to help
- in groups, students share their drafts with the other members of their group and correct mistakes
- the teacher explains the use of references in the paper and instructs the students to include them in the paper; students write the references list for their paper
- the teacher explains the basic structure of the introduction and the conclusion
- homework: each member of the group finalizes the draft of the body paragraph, including the references; as a group: write the introduction and the conclusion, and put the paper together

● Lesson 5 (in a computer lab)

- in groups, students make final corrections, focusing on formatting; include acknowledgements for the participation of the foreigners in field work interviews
- paper checklist: share the finished papers with other groups and receive feedback
- students submit the papers at the end of the class

- ▶ the teacher gives assistance as necessary
- Lesson 6 (in a computer lab)
 - ▶ feedback from the teacher
 - ▶ send the finished papers to the subjects interviewed during field work
 - ▶ decide on further uses for the finished products

(2) 19??の新聞記者になろう!²¹⁾

このユニットは学習者が今後、自分の研究を進めていく時に資料となりうる英字新聞の読み方を学ぶと共に、自分の考えを2段落、200語程度の短いパラグラフに英語でまとめる力を養うことを目的としている。

これまでの中学、高校での英語の指導経験の中、2年間、高校2年生と3年生に時事英語を指導した経験があり、その間に指導した学習者が授業外で自主的に学生用の英字新聞(Student Timesなど)を読む努力をしているという事例に何度も出会ったことなどから、ひととおり英語を勉強した高学年の学習者のニーズとも一致し、彼らのモチベーションを引き出せる英語教材として英字新聞を活用することに手ごたえを感じていたため今回このユニットプランを考えた。

1) 本ユニットの解説

● ユニットの流れ

このユニットは大学1回生を対象とし、1回90分全3時間、1時間目:このユニットのガイダンス、2時間目:グループワークによる英字新聞の作成、3時間目:作品のプチ・コンペティションという構成になっている。(資料1、2参照)

● 事前準備

このユニットに入る事前準備として、直前の授業で資料5を配布し、1時間目の授業までに学習者に読んできってもらう。その際、英字新聞独特の表現など、疑問に思った点をメモしてきてもらう。

● 1時間目の詳細

この時間は英字新聞の特徴の学習と、本ユニットの詳細の説明の2つの項目からなっている。

英字新聞の特徴の学習に関して、まず事前準備で読んでもらった英字新聞(資料5)に関して疑問に思った点を学習者に簡単に発表してもらう。次に資料4を使

って英字新聞の特徴について説明する。このとき教える側の一方的な活動が長時間続くのを避けるため、資料4には穴埋め式にしてある部分があり、学習者が説明を聞きながら活動できる構成になっている。

説明に際し、資料2、資料3を配布する。資料2は学習者向けの説明文で、資料3はこのユニットで作成してもらった英字新聞のテーマとその写真である。課題の英字新聞の作成に当たっては、Headlineのみこの時間に学んだ英字新聞の特徴を反映し、Lead、Bodyの部分には英字新聞の特徴を反映する必要はないことを指示する(このユニットは最終的に学術面で必要な英作文の技術の習得を目標とした授業の一部として考えており、特殊な英字新聞の文体で英作文ができるようになることが最終目標ではないため、Bodyの作成には英字新聞の特徴を反映しないことにする)。

● 2時間目の詳細

この時間は1時間目の課題としてそれぞれの学習者が作成してきた記事を小グループに分かれて評価しあい、その結果を反映し、1枚の記事に仕上げる。

出来上がった記事は授業終了後、グループの代表がSNS²²⁾にアップする(このユニットはSNSが使える学習環境を想定して考えている)。3時間目までに全員がアップされた記事を読んでくることをこの時間の課題とする。

● 3時間目の詳細

この時間は2時間目にグループで一つにまとめた作品のプチ・コンペティションを行う。その際、Headline部門と全体部門に分けもう一度2時間目のグループに分かれて、良い作品を選ぶ。

このプチ・コンペティションの目的は、学習者の英作文へのモチベーションを高めることと、このコンペティションを通して、第三者が読みたいと思う文章とはどのようなものかをグループ内の他のメンバーの意見を聞きながら、考えることである。学習者は大学一回生であるため将来的に英語で論文を書く日が来ることも想定される。多くの人に読んでもらえる英語の論文が書けるようになるための1つのステップとして他者の書いた文章を読む側の立場で客観的に評価する視点を養うことが狙いである。

2) 成果と課題

政策実践外国語の授業において政策科学研究科の大学院学生3名、言語教育情報研究科の大学院学生3名を対象に模擬授業を行った。

その結果次のような成果と課題が得られた。

● 成果

英字新聞を基にした教材は、学習者の興味をひき、一通り英語を学習した高学年の学習者にとっては適切な教材であることがわかった。また、英字新聞の特徴をまとめた教材「英字新聞の読み方」（資料4）の使用により、得られた手ごたえとしては、例文の一部を穴抜きにしたことで、積極的な発言が見られ、授業に参加するモチベーションを高められることがわかった。

● 課題

今回の模擬授業は大学院学生を対象として行ったものであるため、現在の学部1回生の状況と照らし合わせる際、次のような課題が予測される。

大学英语教育におけるグループワークの問題点として、野口、深山（2000）は次のように述べている。「ほかのメンバーの協力を求めると同時に、各メンバーは、グループの一員として何らかの役割を果たす義務があるという自覚もなければならない。グループワーク授業にはよく見られることなのだが、グループ内に積極的に参加をしない『ただ乗りメンバー』がいると、そのグループ内に不満が出てしまい活動の妨げになってしまう。」

この点に関して教員は1時間目に個人に課せられる課題を2時間目の最初にチェックするなどして、学習者に対し自分の割り当て分に責任をもつように促したり、作業中は各グループをまわって、参加していない学習者に参加を促す工夫が必要である。

また、積極的にグループワークに参加しない学習者が出る要因の一つに、英語力に自信がないことも考えられる。その場合、英語に関するもの以外の役割分担を教員側が提示することも一つの解決策となりうると考える。この点に関して野口、深山（2000）は「英語力さえあれば、達成が可能なタスクを与えてしまうと、語学力のない学生はやる気を失ってしまう。英語力がない学生でも、英語以外の知識や能力が生かせるようなタスクが望ましいといえる。たとえば、学習メディアとしてインターネットを利用すれば、『英語が不得意でもコンピューターが得意な学生』がグループに貢献できるチャンスが与えられる」と述べている。

この点を参考にした解決策の一例として、このユニットにおいてはSNSを使用するため、英語が苦手であるが、コンピューターが得意な学習者にはSNSにかかわる作業の担当を提案するなどの工夫が必要である。

（資料1）

19??年の新聞記者になろう！ユニットプラン

①目的

英字新聞を読み、また学習者自身が英字新聞を作成することによって、英文を読んだり書いたりする力、簡単な調査をする力を身につける。

②指導計画（3時間）

1時間目：本ユニットのガイダンス

2時間目：グループワークによる英字新聞の作成

3時間目：作品のプチ・コンペティション

③事前に提示した課題等

前ユニットの最終授業で実際の新聞の例をハンドアウトにして配布、学習者は1時間目までにハンドアウトを読み、英字新聞の特徴を探しておく（学部1回生の読解力では難しいかもしれないので、疑問に思った点をメモしておく程度でよい）。

（3）Getting to know each other!²³⁾

1) 目的

新入生の多くが中学・高校での英語の授業で、「英作文」の取り組みをしてきてはいると思うが、そのほとんどが教科書、問題集に書かれた日本語を英語に直訳するといった練習が多かったのではないだろうか。自分の意見や考えをまとめ、英語で書く練習というのはなかなか実践されていないように思われる。しかしながら抽象であいまいな日本語を和訳辞書を片手に直訳しただけの英語では、外国人にはやはり通じにくい。そこで目標である、エッセイ・ライティング、また最終目標である、アカデミック・ライティングへの第一歩としてこの授業プランを位置づけ、英語的な発想で英文を書くためのスキルを身につけさせるため、以下のステップで授業を進めていく。

①日本語と比較しながら、英語の基本構造を知る。

②英文をセンテンスレベルで、正確に組み立てるための基本的なスキルを確認し、身につける。

③日本語からの直訳ではなく、英語的な発想で英文を書くための原則を理解し、練習する。

2) 授業プランの解説

● 授業プランの流れ

この授業プランは大学1回生を対象とし、大学入学後、この科目の最初の授業となる初回、または2回目から計5回にわたり実施される。

● 1時間目の詳細

導入としてアメリカ女性シンガーの実際のインタビューを聞き、英文と対訳が書かれたインタビュー内容の文を読む。ワークシートに沿って、日本語と比較しながら、英語の基本構造と表現の違いについて知る。留意点として英語の方言や話し言葉の表現にもふれ、英語に対する興味付けへと発展させたい。

次に、授業の意義、内容、今後の予定について説明。課題として、当該授業で学習した日本語と英語表現の違いを意識して、自己紹介文を書いてくるよう指示する。

● 2時間目の詳細

1時間目の課題、それぞれの学習者が作成してきた自己紹介文を紹介する。更に英語での自己表現の幅を広げるため、ワークシートに沿って様々な自己紹介の英語表現に触れさせる。リードとインタビューの書かれたモデルの英文を読み、記事の構成について理解させる。インタビューの進め方について説明する。共に、インタビューするグループとその相手を決定する。その後各グループに分かれて、1時間目の課題であったそれぞれの学習者が作成した自己紹介の文を参考に、インタビューの内容等の準備をする。留意点として、限られた時間の中でいかに効率の良い質問を投げかけ、相手のことを知ることができるのか、上手なメモの取り方等、共に考えさせる。

● 3時間目の詳細

インタビューを実践する。インタビュー終了後、書き留めたメモを参考に、インタビューの中で重要な内容、興味深い内容をまとめさせ、インタビュー内容を英語でかかせる。読む側が興味を持って読みたくなるようなリードも付け加え、記事を完成する。

● 4時間目の詳細

各自仕上げたインタビュー記事を、英語的な発想で英文が書けているのか、また難しく表現できなかった内容等を検討し合い、校正する。グループワークとして書き上げた英文を互いにチェックし合うことで、仲間から新しい英語表現を学び、それまで気付かなかった間違いを発見するなど、互いの学び合いの場とする。

● 5時間目の詳細

できあがったインタビュー記事を冊子にしたものを互いに読み合い、交流する。

3) 成果と課題

本ユニットでは英語的な発想で英文を書くというスキルを身につけさせるために、日本語と比較しながら、英語の基本構造を理解するという練習をし、段階を経て授業を進めていく。これによりそれまで学んできた英語学習の復習にもなり、英語が苦手な生徒にとっても意欲を持たせ、自信持って取り組ませることができる。また授業を進めていく中で、英文を書くライティングスキルだけではなく、教材を工夫することにより、ライティングスキル学習から発展させた他の学習へとつなげていけるのではと考える。例えば、第一回目の授業では、アメリカの女性シンガーのインタビューをリスニングで導入する。そこで英語の方言や話し言葉の表現に多くふれさせることができる。また準備段階ではインタビューを取り入れることにより、限られた時間の中でいかに効率良く質問を投げかけ、相手のことを知ることができるのか、もしくは上手なメモの取り方等、実践で学び取ることができると思う。最終段階では、グループワークで書き上げた英文を互いにチェックし合うことで、仲間から新しい英語表現を学び、今まで気付かなかった間違いにも気づき、互いに学び合うことができると考える。

しかしながら最終の5時間目の授業内容が、できた作品の交流だけに留まってしまい、発展性がない。本ユニットの応用の可能性としてインタビューする対象も友達から、保護者、教員、フィールドワークで出会う方々、興味ある研究に従事されている方々へと発展させていくことで、表現する英語表現もカジュアルなスタイルからフォーマルなスタイルへとつなげていけるのではないかと考える。

(資料1)

Getting to know each other!の指導案

①目的

- ・日本語と比較し、英語の基本構造と表現の違いに気づき、理解する。
- ・インタビューの内容を日本語からの直訳ではなく、日本語と英語の構造、表現の違いを意識して、英文を書くスキルを身につける。

②指導計画（5時間）

- 1 時間目：授業内容のガイダンス、日本語との比較において、英語の基本構造と表現の違いを知る
- 2 時間目：様々な自己紹介の英語表現を知る、リードを付けた、インタビュー記事文の構成を知る
- 3 時間目：インタビュー実践、インタビューの内容を英文にする
- 4 時間目：リードとインタビューの英文をグループで検討、校正
- 5 時間目：作品の交流

（4）SNSを用いたリレー形式のライティングツール開発²⁴⁾

Social Networking Service (SNS) とは、人と人とのつながりを促進・サポートするコミュニティ型のサービス、あるいはそういったサービスを提供する Web サイトを指す。立命館大学政策科学部では、2007年度から、試験的に SNS を導入し、授業運営のツールとしての利用を推進している。

本論では、SNS を利用して、ひとりずつ文章を投稿していくリレー形式で、アカデミックライティングを行うという教材を提案し、その特徴・運営方法について記述する。

SNS を利用したライティングツールは、それ自体が単体の教材ではなく、メインの授業を行いながら、それを補完する、またはレクリエーション的教材として有意義であると考えられる。授業本体とうまく組み合わせて行われることによって、学生のライティングに対する興味にも繋がる。

本論では、まずこのライティングツールの目的について記述し、この教材を利用した場合の授業を行ったプログラムについて述べる。また、授業ケースでは記さなかった今後の課題について記述している。

1) 目的

● 本教材のねらい

本教材のねらいとして、まずライティングスキルの向上を目的とする。どのようなライティングスキルの向上を目指すかについては後述する。次に、グループワークを通して、クラス内のコミュニケーションが円滑になり、

以後のクラス運営にプラスの影響が生じると考えられる。この点から、クラス内のアイスブレイキングとして利用することも考えられる。また、考案者の意図としては「学生が楽しんででき、ライティングに対する興味付けに繋げる」という点に重きをおいている。特に大学教育で要求されるアカデミックライティングなどは、学生から見れば、多くが単調で面白みにかける作業であり、苦手とする学生も少なくない。そのため、学生同士でコミュニケーションを取りながら、楽しみながらできることは、本教材のメリットであると考えられる。

● ライティングスキルアップの焦点

本教材では、以下の4点を特に重視してそのスキルアップを行う。

- ▶ 構文の理解
- ▶ つなぎ語の利用
- ▶ アカデミックな語彙力
- ▶ 英文作成能力の向上

具体的な効果については、次項で述べる。

2) プログラムの解説

● 授業概要

本ユニットでは、第1回目に Directional process essay、第2回目に Informational process essay のリレーを行う場合の授業の進行を記した。2度このツールを利用する理由としては、SNS に書き込むというシステムや、初めてリレー形式で英文を書くという難しさがあり、リレーの要領をつかむことを考えると、2回行うことによって、1回目は比較的容易なもの、2回目は、スキルの上達に繋がるように、段階を踏むことが望ましいと考えられるからである。

Directional process essay (DPE) とは、実際の手順をまとめたエッセイのことで、「ガトーショコラの作り方」や「アパートを見つける方法」など、ひとつの結末に向けて進行していく手順を記述するエッセイのことである。また、Informational process essay (IPE) は、事象の説明、解析をまとめたもので、読み手に、情報の提供、説明、分析を行う。例えば、「第二次世界大戦がどのように始まったか」や「ハリケーンがどのように形成されるか」などについて説明するものを指す。本教材を5週にわたって利用した場合の授業進行について表1に記した。

表 1 授業進行

第 1 回：Directional process essay				
授業内				
内容			所要時間	課題
1st class	Grouping Planning	エッセイリレーについての資料を渡す。メンバー・順番を決め、メンバーでテーマを決定する。テーマと順番を書いた紙を、教師に提出させる。	5～10分程度	決められた順番にそって、Directional process essayを書いてくる。何巡してもいいので次の授業までに完成させる。完成したものを各自印刷して授業に持ってくる。
2nd class	Discussion	グループで、文法の間違いや文章の一貫性について議論する。	5～15分程度	授業内で話し合ったことを参考に訂正する。
第 2 回：Informational process essay				
3rd class	(Grouping) Planning	テーマなどを決定する。	5～10分程度	決められた順番にそって、Informational process essayを書いてくる。書いたものを各自印刷して授業に持ってくる。
4th class	Discussion	グループで、文法の間違いや文章の一貫性について議論する	5～10分程度	次週の授業までに完成させる。
5th class	Presentation	グループごとで作成した Informational process essayを発表する。	※クラス全体の進行状況を見て判断する。授業が遅れている場合には印刷したものを配るだけでもよい	

● 見込まれる効果

「ライティングスキルアップの焦点」において、既に述べたように、その4点をこのケースに当てはめると以下のように言える。

- ▶ エッセイにはIntroductory paragraph、Body paragraph、Concluding paragraphと3種類のパラグラフから構成されており、それぞれの役割を考えながらエッセイを書くことによってアカデミックライティングを身につけることができる。
- ▶ リレー形式で文章を書くことにより、前者の書いたものと、自分で書いたものとの関係性に注意し、つなぎ語の適切な利用を覚える。
- ▶ 特に、IPEでは、グループのテーマに沿った専門性のあるエッセイを書くため、それに応じた専門用語などアカデミックな語彙力を高めることができる。
- ▶ グループワークのため、自分の書く文章に責任を持ち、一文一文注意深く書くことによって、英文作成能力が向上する。

● 1時間目の詳細

1時間目では、まず教材の説明を行う。どのような説

明を行うかは、この授業にどれぐらい時間が割けるか、また、授業内におけるこの教材の位置づけにもよるが、説明に割く時間の目安としては、10～15分程度である。

1時間目では、全体に関することとDPEについて、以下の項目毎に説明していくと生徒も理解しやすい。

- ▶ エッセイリレーとは何か？
- ▶ 授業の進行（スケジュール）
- ▶ SNSへのエッセイの書き込み方
- ▶ プロセスエッセイについて
- ▶ プロセスエッセイを書く際の注意点
- ▶ DPEについて

また、この教材の特徴として、家庭学習の分量が多いということから、授業中に時間を用意しなくても、参考資料を配布し、グルーピングをし、指示を出すだけでよい。

グルーピングに関しては、学生の自発的な選好に任せてもよいし、教師側が予め決めておいてもよいが、その際には、英語力や授業への参加度などが高い学生と低い学生などが固まらないように満遍なく合わせたグループがよいと考えられる。この教材では、構成メンバーは、2名～クラス全員まで可能ではあるが、DPEでは、4～6名程度のグループが適当であると考えられる。

また、DPEの特徴でもあるが、グループ間において、

考えられるテーマが同じようなものに偏ってしまうことがある。授業の進行上、偏ることに問題はないが、その点は、学生がテーマ決めを行っている最中に、教師がフォローを入れるなどしてもよい。1時間目の授業終了時には、テーマとグループメンバーを書いたものを提出させる。次回の授業へ向けて、DPEを書いてくると、それを印刷して持ってくることを指示しておく。今回のDPEでは、5回にわたっての授業進行ということもあり、「1人何回でも書いていいので、最後まで完成させる」という指示を出したが、理解度に問題がある場合や、クラスの雰囲気を鑑みて、1時間目と2時間目との間にも時間設け、徐々にステップアップしていくことも考えられる。

● 2時間目の詳細

2時間目では、1時間目の宿題で作ったDPEを各自印刷して持ってきて、それをグループごとにチェックする。チェックする内容としては、

- ▶ 文章の一貫性
- ▶ 文の文法的間違いの直し

などがあげられる。

これらの項目はグループ内で話し合わせると、グループによっては互いに遠慮し、活発な議論が出来ない可能性もある。このDiscussionに重点を置きたい場合、別途チェックシートなどを用意するなどして、議論を誘発するようにしたい。

また、この2時間目で、つなぎ語の効果などについて授業を行うと効果的である。

● 3, 4時間目の詳細

3時間目では、IPEについてどのようなテーマで書くか各グループで話し合う。DPEとIPEでグループを変えるならば、興味のある分野が重なるもの同士を組ませるなどするとよい。例えば、環境問題、国際関係、経済分野などにグループを分け、その中でも、環境問題なら、「どのように気候変動が起こるのか」など、テーマを決めさせる。グループの構成人数は、DPEと同じく4～6人程度が望ましい。IPEでは、DPEと違い、メンバーで2回にわたって、エッセイを完成させる。例えば、5人のメンバーがいる場合、ひとりひとりパラグラフを書き、1周目で、5番目に書く学生は、ちょうど半分を書き、2周目で、エッセイの結論を書くパートとなる。そのため、IPEを行う際に順番は重要である。文のIntroductionおよびConclusionは、他のパートに比較し

て、難しいということや、学生に予め伝えておく必要がある。また、この時点でのプランニングにおいて、誰が何について、どのように書くかをグループ内で明確にしておかなければ、結論に収まりきらなかったり、結論前に終決することになる。

またこの時間では、参考資料を用い、エッセイの構造について説明を行う。エッセイの構造を理解することは、この教材の主題でもあるので、ここで十分な理解を深めていく必要がある。

4時間目では、3時間目で半分まで書いた文章を印刷して持ってこさせ、グループ内で文法的修正を行ったり、エッセイの流れの軌道修正を行わせる。

● 5時間目

5時間目では、完成させたエッセイの発表会を行う。授業の進行状況によっては、全グループの完成したものを印刷し、配るだけでもよい。ただし、成果としてきちんとした形で締めくくることが望ましい。本教材が有意義なものとなるかは、学生のモチベーションに依拠しており、成果物を用意することによってモチベーションをあげておくということも案出のひとつである。

3) 成果と課題

● ユニットプランの成果と課題

今回、ユニットプランを作成するにあたって、模擬授業として「政策実践外国語（英語）」を受講している立命館大学言語教育情報研究科及び政策科学研究科の学生6名に参加してもらった。本教材の模擬授業を行うにあたり、前述の4つのライティングスキルアップの焦点は、参加者が全員大学院生ということもあり、スキルアップにどれだけ貢献したか、定量的な評価は不可能であったが、SNSという新たなネットワークを利用することによる高い関心を示してくれた。特に、ねらいであげたクラス内のコミュニケーションツールとしての存在に手ごたえを感じることができた。

一方、冒頭で、本教材を補足的教材だと述べたが、大学院生にとっても容易な教材ではないということが分かった。参加者には、自分たちのデータが、公開されているということに対する責任感や、エッセイの構造や流れを理解していなければならなかったが、この難しさが活力になって、本ユニットプランで掲げた目的に達することができるのではないかと考える。

● 今後の課題

今後の課題として運営上の問題点を数点挙げる。

▶ ルール設定に関して

リレーを行う際に、そのクラスの学習目標などによるが、ルールを設けるなどして、難易度をあげることも考慮に入れておきたい。

また、学生によっては、直前の書き込みしか読まず、書き始める可能性があり、全体の英文の構成を考えることを怠ることがある。そのため、「一番最初からしっかり読んでから書き込むこと」などのルールを設け、注意を喚起しておくことも必要である。

以下にリレーのルールの一例を掲載する。

ルールの一例

- ◇ ひとり○文で書き込むこと
- ◇ 最低でもひとり○回は書くこと
- ◇ 最初からしっかり読んでから書き込むこと
- ◇ 前の人の書き込みに文法的な間違いがあれば修正すること
- ◇ 接続詞で終わるのも可能である
- ◇ 自分の書き込みの後には続かない（複数回自由に書き込む場合）
- ◇ 文法的条件の設定
 - ・ 副詞節・従属節を取り入れる
 - ・ 10ワード以上

▶ システム上の問題点

現在使用している政策科学部SNSは、そのシステム上、自分が書いている時に、先に誰かに投稿されてしまうことがある。その際は、「先に投稿された方を優先し、

<付録（の一部）> SNSへのエッセイの書き込み方

後に同じ内容で投稿された方は書き直すこと。」などのルールを予め決めておくか、順番を決めておくなどの必要がある。

▶ 積極的参加者と非積極的参加者

前述したように、本教材は、楽しみながらできる教材という点と、家庭学習の分量が多いという点が特徴であるが、このことにより、クラス内またはグループ内で積極的参加者と非積極的参加者の差が生じることがある。特にリレーは共同作業であるため、グループ内の誰かがリレーを止めてしまうと、そこで終わってしまい、グループ全員の成果として未完成で終わってしまう恐れがある。このような場合、教師が、どうしてリレーが止まってしまったか明らかにし、解決策を考えることが必要である。また、欠席者をどう扱うかなどの課題も存在しており、それらも教師の適切な対応が求められる。

● プログラムを終えて ～まとめに代えて～

ここまで、授業プログラムと今後の課題について述べてきたが、本教材は、授業の進行に伴って、適宜実状に合わせた内容に軌道修正していくことが必要だと考える。それを行うのは、指導側であり、そのため、各々のグループに目を配っておく必要がある。

また、本教材は、授業の補助的教材であるが、他教材との有効な利用方法を考えることにより、授業本体をより充実したものに発展させることができるであろう。



3. プロジェクトの講評

前項のユニットプランの作成者のうち言語教育情報研究科所属の大学院学生は、現職の教員であるか将来英語の教員を目指す者である。一方政策科学研究科所属の大学院学生は一般企業への就職を志望している。しかし、いずれも自分の得意な分野を生かすプランになっている。成果と課題の項目で言及されているように、受講生と担当教員を学生に見立てて模擬授業を行なったため、学部学生以上に反応がよかったと推測できる。またクセンのユニットプランは、上級レベルの運用能力を持つ学生を前提としている。そのため、実際の学部学生を指導する場合には、進度や教材そのものの難易度について気配りする必要がある。さらに、すべてのプランは、クラスサイズやインタビュー相手を探すことなど、プランには書き込んでいない現実的な制約が出てくることを想定しておく必要があるだろう。

しかし、これらのプランはすべて学生の自主的活動とグループワークに基づいており、政策科学部の教学方針に沿ったものである。またクセンや河藤のプランはインタビュー、すなわちフィールド調査を含んでいる。光田と八津川のプランも、文献調査が必要なものであり、前者に関してはフィールド調査を含める展開版も考えられるだろう。いずれにせよ、これらのプランは学生の「知りたい」という意欲を調査に結びつけ、そこで得た素材（データ）をもとに知的好奇心を「表現したい」ことへ彫琢していき、最後にはそれを「英語で」表現するというプロセスを踏むことになる。これは、政策科学部そして社会科学系の学部のみならず、幅広い高等教育機関で必要とされる英語ライティング教育の一つの可能性を示しているといえよう。特に八津川のプランは、オンラインツールを用いているので汎用性が広い。たとえば Informational process essay のテーマを各学部の教学内容に沿って設定することで、さまざまな応用が見込めると考えられる。いずれのプランも、年齢の離れた教員が机上で考えるのではなく、自身が学生に近い立場にある大学院学生が、自分でも「学びたい」ことを考えて開発したプランであることが重要である。それだけに実践する価値が大いにあり、実際に来年度のライティング科目において試験的に取り入れる予定である。

むすびにかえて―課題と展望

これまで社会科学系学部の英語ライティング教育について、実習系科目「政策実践外国語（英語）」におけるユニットプランを素材として、概説してきた。本稿で展開された事例は本学部固有の条件の中で生まれたものであり、サンプル数及び時間的な制約から量的検証を行っていない。しかし、これらの事例はすべて、汎用性が広いと考えられる。「どのように」伝えるかに重点がおかれた高校時代のコミュニケーション・スキル重視のライティングから、まず伝えるべき「何か」を発見させるコンテンツ重視のライティングへ移行するヒントが隠されているからである。大学とは、学生が自分自身で学べき「何か」を探す場所であり、それについて調査する方法、およびその調査結果を明快に表現することを学ぶ場所であるからである。

2008年度から「政策実践外国語（英語）」は言語教育情報研究科との共同開講とし、教育力量の育成を通して受講者のライティング能力そのものを高める努力を続ける²⁵⁾。そして先述した英語103,106では、複数の教員と今年度の「政策実践外国語（英語）」の単位認定者および同等の運用能力を持つ大学院学生（TA）からなる授業実施チームが1回生の指導にあたる。教科内容としては今年度の実践で得た知見を生かし、実際に四つのプロジェクトを行う予定である²⁶⁾。今後は、上述したような英語ライティングの教育のために、よりよいプログラムを開発していくとともに、学部教育における英語ライティングの組織的取り組みについて先進的な事例や、日本語における学術ライティングとの連携などにかんする調査・研究が必要であると考えている。

*本稿は2007年度立命館大学政策科学研究科開講「政策実践外国語（英語）」を担当した田林とその受講生であった八津川（政策科学研究科）、クセン（言語教育情報研究科）、光田（言語教育情報研究科）、河藤（言語教育情報研究科）による共同執筆である。III.2「大学院学生によるプロジェクトの実践例」は大学院学生が、それ以外の部分は田林が主として執筆した。チームティーチングを行った西山淳子立命館大学嘱託講師および受講生全員に感謝したい。

注

- 1) 粗いデータであるが、「大学 英語 ライティング 科目」をキーワードにGoogle検索をかけると312000件がヒットした。一方、「大学 英語 スピーキング 科目」でのヒット件数は14600件、スピーキングをオーラルコミュニケーションにかえると6210件となる。1学年およそ400名規模の政策科学部においても、正課科目109クラスうちライティング科目としては26クラスが開講されている。
- 2) 「大学は、当該大学、学部及び学科又は課程等の教育上の目的を達成するために必要な授業科目を開設し、体系的に教育課程を編成するものとする」(文部科学省、1991)。
- 3) 「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」においては、課題として「コミュニケーションの中で基本的な語彙や文構造を活用する力が十分身に付いていない、内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力が十分身に付いていない状況なども見られる」(文部科学省、2007, p. 109)と指摘してはいるが、改善案として「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の各技能を総合的に育成することをねらいとしている(文部科学省、2007, p. 44。なお、四技能の順番に注意されたい)。新しい科目名は「コミュニケーション英語基礎」、「コミュニケーション英語I, II, III」、「英語会話」、「英語表現I, II」となり、「ライティング」「リーディング」は廃止される予定である。ライティングは、スピーキングとともに「英語表現I, II」で扱われることになる。
- 4) 「英語 ライティング」をキーワードにAmazon.co.jpで検索すると139件がヒットした。
- 5) データベースCiNiiを「英語ライティング 教育 大学」のキーワードで検索した(2007年12月4日)。
- 6) たとえば、秋田工業高等専門学校の小嶋英夫は、English for Science and Technology (EST) 教育の実践としてリサーチペーパー・アブストラクトを対象としたライティング教育について報告を行っている。
- 7) 他方、英語圏では、第二言語習得の理論化と実践にかかわる研究が進んでいる。ライティング教育に関しても教材を含む多くの文献が入手可能である。たとえば“English writing learning higher education”をキーワードとしてWorldCatデータベースで検索すると、学術論文を除く図書やデジタル資料など198件がヒットした。アメリカ合衆国では“composition”、英国では“academic literacy studies”と呼ばれることの多い第一言語における(英語)ライティング教育も含めると、さらに多い研究がなされている。たとえば、学術的な思考の展開と関連付けたFlower (1994), Bean (1996), Ede (2004) や社会階層との関連に着目したLillis (2001) などがある。
- 8) 当時の教育課程(1994-1997)は、英語、ドイツ語、フランス語、中国語から1言語を16単位履修することが卒業認定要件であった。英語履修者はリスニング、ライティング、スピーキング、Computer Assisted Instruction (CAI) の四科目を二年にわたり履修した。
- 9) 外国語科目の要卒単位は8単位に減じられ、ライティングはEnglish Literacy (1998-2001) やオーラルコミュニケーション(2002-2005)という科目に統合された。
- 10) 基礎演習(1回生)、研究入門フォーラム(2回生)、専門演習I(3回生)、専門演習II(4回生)をいう。政策科学部ではこれらの科目をコア科目と位置づけ、登録必修科目や配当回生履修指定科目として履修を動機づけている。
- 11) 学生の研究テーマについてはウェブページ「政策科学部/学生の研究テーマ」にて検索できる。
- 12) この取り組みについての詳細な報告は別稿に委ねるが、ここでは、この取り組みによって学生の英語学習にかんして言語教員のみならず、セミナー担当者の関心が惹起され、両者の間の共同・協力関係が生まれてきていることを指摘しておきたい。
- 13) 具体的には、英語ライティング能力の高い大学院学生らと、研究会を行いつつライティング・チューターとして育成するとともに、実際にヘルプデスクを開いて学部生の指導にあたらせた。初年度である06年度は5名のチューターを育成し、ヘルプデスクを77時間開室した。07年度前期は4名のチューターと1名の実習生とで、18時間開室した。
- 14) 政策科学研究科は06年度に、「ローカルガバナンスの政策実践研究」で魅力ある大学院教育イニシアティブに採択された。このプログラムは、大学院学生の英語ライティング能力開発に基づく研究力量と研究資源の国際化を目標の一つとし、ケースペーパーの英語化とアーカイブ化、英文学術雑誌*Journal of Policy Science*の刊行などを行っている。プログラムの詳細はウェブサイトを参照のこと(「魅力ある大学院教育イニシアティブ」)。
- 15) この改革の目的は第一には科目の標準化である。教科内容、教育方法、評価方法を標準化することにより、どのクラスに所属するにかかわらず、学部として学生に最低限身につけさせるべき内容をすべての学生に学習させる。第二には、学生間の交流が挙げられる。今までの35人のクラス編成では、各クラスにおける学習活動が他のクラスに見えにくい構造になっていたが、少人数編成のLearning Unit (LU) の導入により、フットワークの軽いさまざまな活動に取り組めるようになるとともに、クラスとして他のLUに所属する学生の活動を知り、交流することが可能になる。第三には有資格者のTA (Teaching Assistant) の教育力量の増強を通して、大学院学生自身の英語にかかわる実践的研究力量の涵養をはかることである。
- 16) 学生の自主的活動、グループワーク、フィールドワークを三つの柱として行われる「研究入門フォーラム」。その中のDecoding Kyoto (「Decoding Kyoto—京都を英語に」)では、京都市中心部の商店街の情報を英語化してウェブサイトにて公開する活動を行い、第3回政策系大学・大学院研究交流大会「京都から発信する都市政策」で、パネル発表としては最高の「大学コンソーシアム京都理事長賞」を受賞した(政策

- 系大学・大学院研究交流大会)。
- 17) ①The Day I Was Born (「The Day I Was Born . . . : Birthday Report」) は、学生が自分の生年月日の新聞を調査し、その日の記事から、社会・文化・経済関連の重要な出来事の記事を選び、英語で表現する「誕生日プロジェクト」。また、その出来事が現在 (and/or その出来事以前に) どのようになっているか考えさせることもできる、社会研究としても広がりのあるプロジェクト。②Decoding Kyoto は前述のとおり。この授業では、商店街のマップと説明文の英語への試訳を行ない、日本語を理解しない住民や観光客にわかりやすいマップの作成について検討した。また同じプロジェクトを行っている 2 回生のクラスで実習を行った。③の Story / Essay Relay については、III.2 で事例として扱う。
- 18) 本稿で紹介できなかったプランには、状況に応じた手紙文の書き方や英文記事の検索とその要約の作業を経て 300 語程度のエッセイを書くものなどがあつた。
- 19) いずれも授業の目的、方法、成果と課題、参考文献からなるレポート本体と、開発した教材から構成されていた。紙幅の制限から、本稿ではクセンの一部を除いては教材の掲載はできなかった。教材を含むプランの完全版は政策科学研究科のウェブサイトからアクセスが可能である「大学院学生による学部生対象英語ライティング授業プラン (仮題)」。
- 20) クセンによるこのユニットプランは、Rationale だけで 8 ページ、教材だけで 21 ページにおよぶ。しかし、紙幅の制限から、Rationale からも 10 項目を省略せざるを得なかった。このプランの完全版も上記サイトにてアクセス可 (「大学院学生による学部生対象英語ライティング授業プラン (仮題)」)。
- 21) 光田によるユニットプラン。
- 22) Social Networking Service。詳細は II. 2. (4) を参照のこと。
- 23) 河藤によるユニットプラン。
- 24) 八津川によるユニットプラン。
- 25) 言語教育情報研究科における科目名は「ライティング指導実習」である。また来年度の実習先は先述した 1 回生対象ライティング科目 (英語 103,106) である。
- 26) 河藤のプランを修正した Getting to Know Each Other の他、Decoding Kyoto 基礎編、The Days We Were Born, Writing a Research Proposal が予定されている。

参考文献

- 小嶋英夫 (2002) 「日本人学生に対するリサーチ・ペーパー・アブストラクトの効果的な英語ライティング指導へのアプローチ」『JACET 全国大会要綱』、大学英語教育学会、第 41 巻、212-213 ページ。
- 深山晶子 (編)、野口ジュディー (総監) (2000) 『ESP の理論と実践—これで日本の英語教育が変わる』三修社。
- 文部科学省 (1991) 「大学設置基準の一部を改正する省令の施

- 行等について」(平三文部省令 24 号)
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc_01.htm (2008 年 1 月 7 日)
- 文部科学省 (1999) 「高等学校学習指導要領」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301/031226_03.htm (2008 年 1 月 7 日)
- 文部科学省 (2007) 「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/001/07110606/001.pdf (2008 年 1 月 7 日)
- 立命館大学「2007 年度オンラインシラバス (政策実践外国語 (英語))」
http://online-kaikou.ritsumei.ac.jp/2007/syp/show?course_code=31181 (2008 年 1 月 7 日)
- 立命館大学政策科学部「Decoding Kyoto—京都を英語に」
http://www.ps.ritsumei.ac.jp/college/fl_read.cgi?key=1col2006920124215 (2008 年 1 月 7 日)
- 立命館大学政策科学部「The Day I Was Born . . . : Birthday Report」
http://www.ps.ritsumei.ac.jp/college/fl_read.cgi?key=1col2006920143834 (2008 年 1 月 7 日)
- 立命館大学政策科学部「政策科学部 / 学生の研究テーマ」
<http://www.ps.ritsumei.ac.jp/shige2/psdb/index.htm> (2008 年 1 月 7 日)
- 立命館大学政策科学部「政策系大学・大学院研究交流大会」
<http://www.ps.ritsumei.ac.jp/college/consortium2007.html> (2008 年 1 月 7 日)
- 立命館大学政策科学研究科「魅力ある大学院教育イニシアティブ」
http://www.ps.ritsumei.ac.jp/school/3cols_read.cgi?key=3col2006861950 (2008 年 1 月 7 日)
- 立命館大学政策科学研究科「大学院学生による学部生対象英語ライティング授業プラン (仮題)」
<http://www.ps.ritsumei.ac.jp/school/englishwriting> (2008 年 3 月公開予定)
- Bean, J. C. (1996). *Engaging Ideas: The Professor's Guide to Integrating, Critical Thinking, and Active Learning in the Classroom*. San Francisco: Jossey-Bass Publishers.
- Ede, L. (2004). *Situating Composition: Composition Studies and the Politics of Location*. Carbondale: Southern Illinois UP.
- Flower, L., Wallace, D.L., Nowis, N., & Burnett, R.E. (1994). *Making Thinking Visible: Writing, Collaborative Planning, and Classroom Inquiry*. Urbana, Ill.: National Council of Teachers of English.
- Lillis T. M. (2001). *Student Writing: Access, Regulation, Desire*. London: Routledge.